友へ
チング
郭暎澤
金重明◉訳
文春文庫

CHIN GU
by KWAK, Kyung-Taek
Copyright © 2001 by KWAK, Kyung-Taek
Original Korean Edition published by Dari Media in 2001
Japanese language paperback rights reserved by Bungei Shunju Ltd.
by arrangement with KWAK, Kyung-Taek
through Imprima Korea Agency, Korea

文春文庫

友(とも)へチング

定価はカバーに
表示してあります

2002年2月10日　第1刷

著　者　郭暻澤(クアクキョン テク)
訳　者　金重明(キム チユンミヨン)
発行者　白川浩司
発行所　株式会社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3-23　〒102-8008
TEL 03・3265・1211
文藝春秋ホームページ　http://www.bunshun.co.jp
文春ウェブ文庫　http://www.bunshunplaza.com

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本　　Printed in Japan
ISBN4-16-752798-7

文春文庫

友へチング

郭暻澤
金重明訳

文藝春秋

はじめに

七歳のときでしたか、ある日、母が市場で糸を買ってきました。

まるで決められた日課のように、家の近くの路地で、泥棒遊びやらオルムテンイ（ともに子供の遊びの一種）といった、いま考えてみれば実に他愛のない遊びに夢中になっていたわたしは、母に手を引かれて、いやいやながら家に連れ戻され、両の手で輪になった糸の束を支え、母が白い雪玉のような糸のかたまりを作る手伝いをさせられました。

あのときは、なぜあれほど、母を憎らしく思ったのでしょうか……。

塀の向こうから、あちらの路地、こちらの路地と走り回る子供たちの足音や騒ぎ声がとぎれることなく聞こえてきます。わたしはもう我慢ができなくなっていました。

一つの糸の束が無事糸玉に変わり、わたしの両腕には二つ目の糸の束がかけられていました。そのとき、母がちょっと席を外したので、わたしは両腕の糸の束を放り出して、家を飛び出してしまいました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

夕闇が村を覆うころまで、糸の束のことなどすっかり忘れて遊びほうけていたわたしは、友と別れ、家の前に着いたときになって初めて、少し心配になりました。

しかし、たかが糸の束のこと、大したことはないだろうと思い、いつものように「かあちゃあん」と叫びながら家に入りました。すると母は何もいわず、糸の束をわたしの前に差し出しました。

それは、わたしが大急ぎで手からはずしたひょうしにこんがらがってしまい、とても使い物にならなくなった糸の束でした。

長い歳月、意識の底に沈んでいた記憶の破片を一つずつ引っぱり出し、呼び起こすという作業をしていたとき、ふと、幼いころのこんがらがった糸の束のことを思い出してしまいました。

ぐるりと一巻きほどいてみても、またこんがらがった糸の束と格闘しなければならず、一つの結び目をほどいたところで、事態は一向に改善されません。ついにカッとなって、はさみで切ってしまったのですが、すると糸の切れ端が床に散らばり……。

もしかしたら、追憶というものはこの糸の束そのものなのではないか、と思ったりもします。

追憶の再生というのは、意識と無意識の空間の中に、無秩序に浮かぶ糸くずを苦労して集め、つないでいくという実に苦労の多い作業だということです。まして、歳月という魔法によっても脱色させることを許されない愛惜とその重みをそのまま蘇らせなければならなかったのですから、この糸くずのもつれをほぐし、つないでいくという作業を進めていた長い歳月は、胸が

痛み、恥ずかしさで身を縮ませる毎日でした。

それにもかかわらず、このつらく、また悲しみの伴う作業を途中で放棄することなく完成させることができたのは、人生のほぼ半分を生きたという位置に立ち、どのような形であれこれまでの半生を整理しなければならないと感じていたからであり、そしてなによりも、友らにとって重要なその瞬間に、本意ではなかったにしても、一緒にいることができなかったことに対して、決まりが悪いながらも握手を求めて手をさしのべたかったからです。

誰にとっても人生は大切なものです。その大切な人生を、どのような形であれ記録に残すことができたという事実は、その人生が喜ばしいものであったか悲しいものであったかはともかく、価値のあることではないかと思います。

未熟なわたしに、このような貴重な作業を無事に終えることができるよう配慮と助言を惜しまなかった多くの方々に、あらためて感謝の意を表します。

また、現実とは関係なく、いつも変わらぬ姿でわたしの追憶の島に生きている懐かしい友らに、もう一度小さな手をさしのべようと思います。

二〇〇一年三月二五日　陽射しが懐かしさを倍加させてくれる日に

郭曠澤（クアクキョンテク）

友へ

チング

目次

はじめに　3
第1章　四人の悪ガキ　11
第2章　思いがけない消息　57
第3章　高校時代の武勇伝　79
第4章　ほろ苦き青春　113
第5章　大乱闘の末に……　153
第6章　運命という海　191

第7章　嵐の予兆　235
第8章　華やかな挙式の陰で　255
第9章　血で血を洗う抗争　285
第10章　苦渋の決断　311
第11章　愛する女(ひと)との一夜　337
第12章　さらば、友よ！　355
終わりに　377
訳者あとがき　379

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

主な登場人物

鄭相沢……四人の幼なじみの一人
　信愛……相沢の妹
李俊錫……四人の幼なじみの一人。父親は有名なやくざ
　真淑……俊錫の女友だち。のちに妻に
李重豪……四人の幼なじみの一人。母親は密輸商
韓東秀……四人の幼なじみの一人。父親は葬儀屋

李炯斗……俊錫の父の後を継いだやくざの親分
　トルコ……俊錫の遊び仲間で真淑の従兄弟。のちに炯斗派の中堅幹部
　チャンガ……俊錫の腹心の部下
車尚坤……炯斗と対立するやくざの親分
　朴殷基……尚坤を裏切る部下

第1章　四人の悪ガキ

晴れ上がった空を横切って、巨大な機体がゆっくりと降下している。相沢(サンテク)は安全ベルトを締めた体を椅子に埋めながら、祖国の空が近づいてくる光景を見ていた。数年前、祖国を旅立ったときとはまた違う感傷が心を刺す。ドスンという衝撃とともに、機体は空港に着陸した。

空港を離れるタクシーの後部座席に、相沢と妹の信愛(シネ)は並んで座っていた。相沢の表情はこわばっていた。そしてそのような相沢を、信愛はすまなそうに眺めていた。相沢はたばこをくわえながら、窓の外に視線を投げた。ゆっくりと浮き上がってくる名前と顔が、そこで微笑んでいた。俊錫(チュンソク)、重豪(チュンホ)、そして東秀(トンス)。すっかり忘れてしまったようではあっても、いつも胸の奥でしっかりと生きつづけてきた名前だ。それはちょうど、広い海を眺めているときは青い海と空しか見えなくても、船を漕ぎだしていけばいつでもその位置を変えることなく迎えてくれる島のようなものだった。煙の向こうからぼうっと透けて見える古い白黒写真のように浮かび上がってくるかすかな何かを探していた相沢の口元に、小さな名前が一つひっかかった。

「俊錫……」

二十年を越える歳月、「友」という言葉で互いを考えることをやめようとはしなかった彼らであった。積み重ねられる歳月の重みの中から、一緒にいたということだけが生き生きと輝く記憶を残してくれた、友だった。

しかし考えてみれば、俊錫は、相沢にとって重要な人生の瞬間に、一緒にいてくれたわけではなかった。医者への夢を捨てて新兵訓練所に向かう列車に乗り込んだ停車場にも、青春の彷

徨に別れを告げ、思い切って留学の道に旅立った空港にも、彼は現れはしなかった。逆に相沢自身も、俊錫のそばにいてやらなければならないとき、一緒にいることはできなかった。俊錫の母親が死んだときも、父親が死んだときもそうだった。それだけではなく、相沢と俊錫は、二人で写真を撮ったこともなかった。しかし、相沢が思い浮かべる俊錫という音の響きには、他のどのような名前とも違う特別な感情がこもっていた。相沢の記憶の中で俊錫は、常に追憶の岸辺でもっとも美しく輝いていた。

相沢の視線は、分厚い車の窓の向こう、生きていけばいくほどわからなくなっていく世の中を凝視していた。

「友よ……」

俊錫には口癖があった。名前を呼ぶのではなく、しばしば「友よ」と親しげに呼びかけてきた。その口癖をまねる相沢の声には、理解しがたい痛みと悔恨が混ざっていた。

過去は、美しいから郷愁の対象となるというわけではない。過去は過去であるがために、二度と戻ることのできない記憶の出生地であるがために、懐かしいのだ。相沢の目はぼんやりと過去の記憶を追っていた。忙しい日常の中で片隅に片づけられているようにみえても、意識せずに呼吸している空気のように、常に彼のすぐそばに生きつづけてきた追憶だった。そしてその中にはいつも、目の光に孤独と混乱をたたえ、顎が長く伸びた俊錫の顔があった。

消毒薬噴霧車が白い煙を吐きながら路地を縫って進んでいく。坂の多い狭い道に沿って並ぶ

薄暗い家の中から、人々が飛び出してきた。半袖のブラウスやランニングシャツを引っかけただけの大人たちは、家の中に消毒薬を呼び込むため、ドアをいっぱいに開き、無邪気な子供たちは興奮した面持ちで噴霧車のあとを追っていく。大人たちが開いたドアの間から、たらいの中に子供を入れて入浴させているおばさんや、醤油瓶の台を拭いている老婆の皺だらけの手が見え隠れする。木の扉のそばでうちわを使いながら微笑んでいた半袖シャツのおじさんが、婦人用のコムシン（ゴム製の靴）を引っかけて飛び出してくる。子供たちは大声をあげながら噴霧車の後ろについている煙突に向かって、そこに吸い込まれていくかのような勢いでついてくる。鼻をつままれてもわからない白い煙の中で騒ぎ回っている小学生ぐらいの子供の数は、二十人を超えていた。

噴霧車が路地を抜け、小さな川にかかる橋を越えていく。このあたりまで来ると、さすがに子供たちの数も半分ぐらいになっていた。やっと七、八人といった子供たちが、肩で息をしながら必死になってついていく。

続いて噴霧車と子供たちは市場に近づいた。一九七〇年代によく見られた市場で、大小さまざまな店が道に沿ってずらりと並んでいる。叫び声をあげながら走っていた子供の中の何人かが、煙をかきわけて店の陳列台のほうに駆け出し、まるでハゲタカが獲物をつかむように、陳列台の上の餅や果物、菓子などをつかみ、再び煙の中に身を隠した。店の主人がそれに気がついて飛び出したときはもう遅い。遅れてしまった女の子の手をつかむのがやっとだった。

市場を抜けると噴霧車は丘に向かう。上り坂だが、それでも何人かの子供たちは前になり後

ろになりながら噴霧車のあとを追った。下り坂にさしかかると、子供たちは噴霧車の尻を逃すまいと必死に駆け下りた。子供たちのうちの何人かは、息が切れて落伍した。

最後に噴霧車は速度を上げ、大通りに向かった。煙突から出る消毒薬の煙がだんだんと薄くなる。噴霧車の姿がずっと向こうに見えなくなるころ、最後まで噴霧車を追っていた三人の子供の姿が消えかけている煙の中から現れた。三人は顔を上気させ、肩で息をしていた。子供たちはいまにも息が詰まるかのようにぜいぜいしていたが、それでも最後まで残ったことがいかにも誇らしいとばかり、意気揚々とした表情で互いを見つめていた。

三人のなかでもとりわけ腕白そうにみえる、下顎が突き出た俊錫（チュンソク）が、両手に持っていたリンゴを見せてから、一口かじった。味もなかなかのものらしく、にっこり笑うと、口を開いた。

「どうだ、おれの手が一番だろ」

少し茶がかった髪に、脱色したように皮膚が白い東秀（トンス）が、大根一束を差し出す。

「こっちのほうがでかいぜ」

俊錫も負けてはいない。

「でも、こっちのほうがうまいぞ」

卵形の長い顔をした相沢（サンテク）の手には、氷が溶けて水がぽたぽた垂れている鯖が握られていた。言い争いをしていた俊錫と東秀は、相沢の姿を見てけらけらと笑いはじめた。相沢も照れくさいのか、笑ってごまかした。

三人は急に何かを思い出したというように、後ろを振り返った。背が低く、いかにも不細工

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com